

Can do をベースにしたカリキュラムの事例 [留学]

竹田悦子 (コミュニカ学院)

(1) カリキュラム開発の経緯、背景

・ 1988 年 ~

「コミュニケーション：わかちあい」を建学の精神とし、「異文化間教育としての日本語教育」（文化移動や異文化接触を契機とする人間形成・発達等に関わる日本語教育。ミクロレベル：人格の拡張・新たなアイデンティティ・自己感の形成、メゾレベル：地域社会の維持・発展・共生、マクロレベル：教育を通じた世界の平和の維持・構築に寄与する日本語教育）開始。

「社会的行動様式四分類」を作成し、シラバス・カリキュラムを設定。

- 1) 知的行動の仕方（ものの感じ方、考え方などの大脳行動も含む）
- 2) 相互作用的な行動の仕方（闘争や交渉、協調の仕方など）
- 3) 物、自然に対する行動の仕方（食料品の生産、芸術品の作り方など）
- 4) 超越的存在に対する行動の仕方（超越的存在の想定と交流の仕方など）

学習対象：スキーマ理論の応用。コーパスの収集と教材化『日本語コミュニケーション』

・ 1990 年代 ~

CEFR の中心的な理念「Action-oriented approach（行動指向アプローチ）」に注目。

・ 2000 年 ~

日本語コミュニケーションを実質的に行う能力を「場」と「機能」のマトリクスで捉え、「社会的行動様式四分類」によるシラバスを詳細化(注 1)。

・ 2001 年 ~

CEFR 公開。CEFR を参照しつつ、カリキュラム改訂。

参照したもの：言語教育・学習の目標（自律的学習者・学習者オートノミー育成、
熟達レベル、カリキュラムの透明性、例示的能力記述文、ポートフォリオ学習

・ 2008 年

平成 19 年度文化庁委嘱事業「生活者としての外国人のためのモジュール型カリキュラムの開発と学習ツールの作成」

・ 2010 年 ~ 2017 年

「Can-do Statements 研究会」において、日本語学校における進学予備教育の到達目標スタンダード作成（注 2）。

・ 2015 年 日振協版日本語スタンダードの開発協力・参照

・ 2018 年 ~ 現在

CEFR/CV で具体的な尺度が示された「mediation」のカリキュラム化を検討中。

(2) 対象、目的

対象：(日本語)留学生(進学を目指す人、就職する人、趣味や教養として学ぶ人)

目的：①言語使用域におけるニーズ：日本語を使ってキャリア形成(進学・就職)、社会文化的生活を実践すること。②人格形成上のニーズ：教養(リベラル・アーツ)としてのことば、「わたし」という人格を形成することば。ことばが個人、社会、世界に対して根源的に持つ力を学ぶ。

(3) カリキュラム作成のプロセス

- ・「行動様式四分類」の中で特に言語 Comm.に特化した部分については、CEFRの熟達レベル、評価、学習の方法を参照し、2年間の到達レベルごとの包括的な目標を設定。
- ・言語的な発達段階(3か月ごと8段階、全2年間)を縦軸に、領域(科目群)を分類して横軸に配置。目的と目標を記述。まず全体、次に3か月ごと、そして科目ごとに細分化した到達目標を記述。(別紙1「2年課程全体のカリキュラム概要」参照)
- ・教材・方法・評価方法をレベルごとに記述。(別紙2「B2-2 レベルの読解カリキュラム例」参照)

表1 コミュニカ学院のレベル設定

コミュニカ学院 レベル名	共通参照 レベル
Step1+	C1
Step1	B2.3
Step2	B2.2
Step3	B2.1
Step4	B1.3
Step5	B1.2
Step6	B1.1
Step7	A2.2
Step8	A0-A2.1

表2 コミュニカ学院 カリキュラム概要【科目群・2年課程】

科目群	科目・内容	コマ数 3か月
日本語プロパー系	日本語コミュニケーション、 発信表現、記述、読解、聴解など	121~175
キャリア系	大学・大学院進学演習、 JLPT・EJU・BJT対応、 日本就職事情、ビジネス日本語など	0~36
ダイバーシティ系	異文化理解、 ランゲージ・アウェアネスなど	9~18
マネジメント系	ポートフォリオ学習など	4~8
その他	行事(式典、オリエンテーション等)	8~12

(4) 評価の方法

- ・到達度の評価：バックワードデザインによる評価ツールの作成。これができれば目標を達成したと言える学習成果を確定し、学習開始前に評価ツールを作成する。
- ・評価ツール：従来型筆記試験、代替的評価(パフォーマンス評価、自己評価、ピア評価)など。
- ・パフォーマンス評価は、発信系科目で口頭または筆記でのコミュニケーション課題について、達成度をルーブリックで評価。
- ・熟達度評価：従来型のプロフィシェンシー・テスト、外部評価(J-CATなど)、ポートフォリオ評価、自己評価。

(5) 運用した結果、効果

- ・学習者が日本語を使って何ができるようになったかをメタ認知できるようになった。
- ・自分で自分の学習をコントロールする能力が付き、エンゲージメントが起きる。
- ・学習者としての自己への理解が深まる。
- ・学習に対する自律的な態度（オートノミー）が形成される。

（→具体的には、自分の学習上の課題が明確になり、主体的に受講科目や進級ないし再履修を選択する学生が増えた。）

(6) 課題

- ・包括的な能力育成を目的に、教育の場面に落とし込む際、包括的な能力記述文をより具体的な Can do（要素）に還元したとして、個々の要素を習得すれば、包括的な能力を身につけたと言えるのか。要素還元主義の罠をいかに避けるか。
- ・経験ある教師でも、参照枠やレベル区分やレベル判定には不慣れな場合があるため、十分な教師研修が必要。
- ・mediation，オンラインのスキルなどを、いかに教育実践に落とすか。

(7) カリキュラムのサンプル

1. 2年課程全体のカリキュラム概要（別紙1・非公開・机上配布のみ）
2. B2-2レベルの読解カリキュラム例（全16回、32コマの概要）（別紙2）

注1)「場」とは、特定の文化集合が発揮する方向性をもった力学的な力であり、文化的文脈を形成するものである（宇野、1990）。「機能」とは、ある行動がどのような目的で行なわれるか、ということ。ここでは、この二つを用いて、日本語学習者が日本で遭遇したり、話題として取り上げられたりする可能性のある行動を整理。

注2)到達目標を「言語学習系」と「非言語学習系」の2分野に分け、さらに「言語学習系」を「アカデミック」「キャンパス」「生活」の3領域に、「非言語学習系」を「学習コントロール」と「進路決定」の2領域に、計2分野、5領域に分類し、CEFRを参照し、スタンダードをCan-do形式で表示。

参考文献

奥田純子(2016)「学習の『選び直し』を通じた学習者オートノミーの支援」『ことばと文字』2016年6月号「国際化時代の日本語と文字を考える」くろしお出版，pp.46-55.

コミュニカ学院(2001) 財団法人日本語教育振興協会平成12年度文部省補助事業「教材等研究・開発等」研究協力校調査・研究実績報告書「大学進学準備教育シラバスの再考——『日本留学のための新たな試験』への対応課題を中心に(1)——」

コミュニカ学院(2008)『平成19年度文化庁委嘱事業「生活者としての外国人のためのモジュール型カリキュラムの開発と学習ツールの作成」』報告書

コミュニカ学院(2021)『2021年度コミュニカ学院イヤーズブック』コミュニカ学院(未公刊)

日本語教育振興協会(2015)『日本語教育スタンダード』

Can-do Statements 研究会(2012)「Can-do Statesments 研究会活動記録 2010-2011年度 日本語学校における進学予備教育——到達目標スタンダードの作成」

Can-do Statements 研究会(2018)「Can-do Statesments 研究会活動記録 2012-2017年度 日本語学校における進学予備教育——到達目標スタンダードの作成」

表 B2-2 レベルの読解カリキュラム例 (全 16 回、32 コマの概要)

レベル	コミュニケーション学院 Step2(B2.2)
科目名	読解
コマ数	32 コマ (1 回 2 コマ、全 16 回)、50 分/コマ 期間: 3 か月
目的	幅広いジャンルやテキストタイプのオーセンティックな文章を読む力をつける。筆者の論点や意図を的確に把握できるアカデミック・リーディングの力を養い、クリティカル・リーディングへとつなぐ土台をつくる。また、エッセイや小説など文学作品などで楽しんで読むことを経験する。さらに、分量の多いものを辞書を引かずに、ある程度のスピードを持って読める読解力をつける。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事やエッセイ、コラム、解説文を読んで、詳細な事実関係、論理展開、現状、展望、背景、因果関係、理由、根拠、筆者の主張など重要なポイントが把握できる。 ・身近な社会現象や、やや抽象的なテーマについて書かれたエッセイや解説文を読んで、その内容を概念的に整理して理解することができる。 ・エッセイや小説など、十頁程度の分量の読み物を、辞書を引かずに一息に読んで要旨を理解することができる。 ・{CR} 書かれたことを正確に理解したうえで、テキストの内的整合性の観点から内容を批判的に検討でき、書かれたことを自分の考えや経験と照合することができる。
使用教材	『読む力 中上級』(くろしお出版) など
学習方法	速読&全体把握、認知タスク&テキスト再読(読みの精緻化)、CR(クリティカル・リーディングの問い)による口頭でのディスカッションとコメント作成、ピアによる読み。スキル表による事前の評価と事後の学習のリフレクション(振り返り・内省・メタ認知を含む)
評価方法	学習者による到達目標の設定と自己評価(ポートフォリオも活用)、筆記試験
回	到達目標
1	初回オリエンテーション(科目の目的・目標・評価、教科書の特徴、オートノマスに学ぶとは、授業の進め方、多読日記オリ、各自の目標設定) ・クリティカル・リーディングの概要・意義・必要性を知る
2	教養書の一節を読み、筆者の問題提起、論点、主張、意図などが把握できる(その1)
3	教養書の一節を読み、筆者の研究の動機と仮説の概要が把握できる(その1)
4	教養書の一節を読み、筆者の研究の動機と仮説の概要が把握できる(その2)
5	教養書の一節を読み、筆者の問題提起、論点、主張、意図などが把握できる(その2)
6	エッセイやコラムを読み、比較、対照、構造化、アナロジーをpushしながら、筆者の主張、意図が把握できる(その1)
7	エッセイやコラムを読み、比較、対照、構造化、アナロジーをpushしながら、筆者の主張、意図が把握できる(その2)
8	エッセイやコラムを読み、比較、対照、構造化、アナロジーをpushしながら、筆者の主張、意図が把握できる(その3)
9	専門書の目次を読み、目的に応じて目次からその本で読むべき箇所を見つける(その1)
10	エッセイやコラムを読み、比較、対照、構造化、アナロジーをpushしながら、筆者の主張、意図が把握できる(その4)
11	試験返却、解答解説(学習の振り返りとメタ認知) 数十頁の分量の読み物を、辞書を引かずに一息に読んで要旨を理解できる(その1)
12	専門書の目次を読み、目的に応じて目次からその本で読むべき箇所を見つける(その2)
13	数十頁の分量の読み物を、辞書を引かずに一息に読んで要旨を理解できる(その2)
14	専門分野の入門書の一節を読み、調査結果を比較、対照しながら、筆者の主張が把握できる(その1)
15	テキストの内容を批判的に検討でき、書かれたことを自分の考えや経験と照合できる
16	専門分野の入門書の一節を読み、調査結果を比較、対照しながら、筆者の主張が把握できる(その2) 3 か月間の学習のリフレクション、自己評価

注) モジュール型カリキュラムのため、2 回~15 回の順序は問わない。